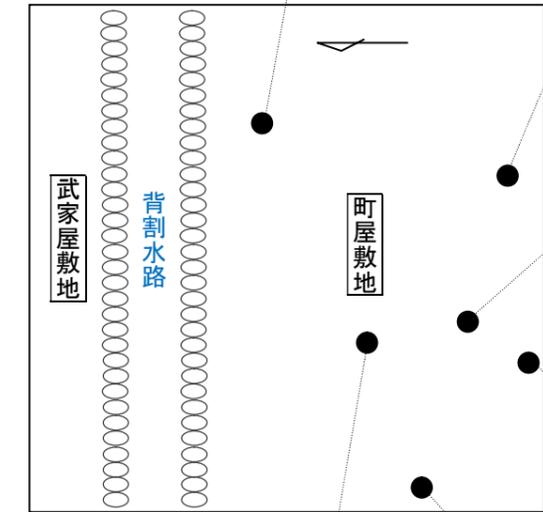


## 【その他の遺構・遺物】

主に町屋敷側で井戸や木製品を含む穴などが見つかっています。



# 富山城下町の調査

現地見学会

平成26(2014)年2月11日(火・祝)

江戸時代の背割水路。平らな石を5~8段程度積んで造っている



- 1 原因工事 一番町共同ビル新築工事に伴う発掘調査
- 2 工事主体 朝日印刷株式会社・株式会社北陸銀行
- 3 調査主体 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 4 調査期間 平成25年11月～平成26年2月
- 5 調査面積 423 m<sup>2</sup>
- 6 概要

富山城下町を東西に延びる石積みの背割水路が、約20mにわたって見つかりました。江戸時代はこの水路を境に北側が武家屋敷地、南側が町屋敷地に分かれていました。今回の調査は、江戸時代後期から昭和時代まで少なくとも3段階の水路の変遷があることが確認でき、当初約1.8mの幅があった水路が、徐々に幅を狭くしながら造り替えられていく様子が分かりました。水路の全容と移り変わりがこれだけ明確にわかったのは今回の調査が初めてです。

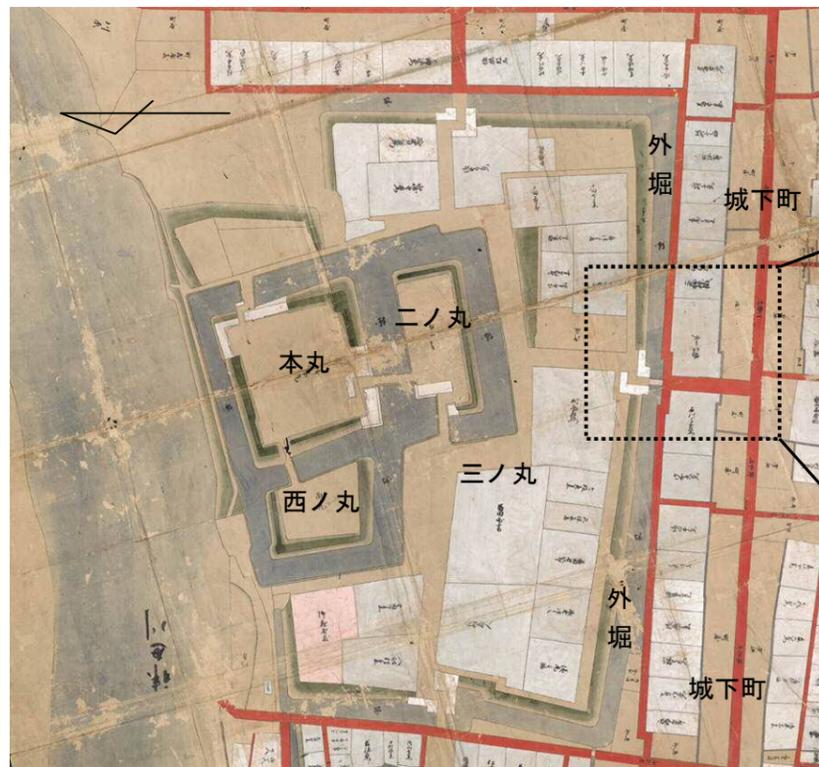
せわり  
【背割水路】

富山城外堀の南辺に平行して城下町を東西に流れていました。水路を境に北側が武家屋敷地、南側が町屋敷地に分かれ、背中合わせになった武家屋敷と町屋敷の間を流れていたことからこう呼びます。

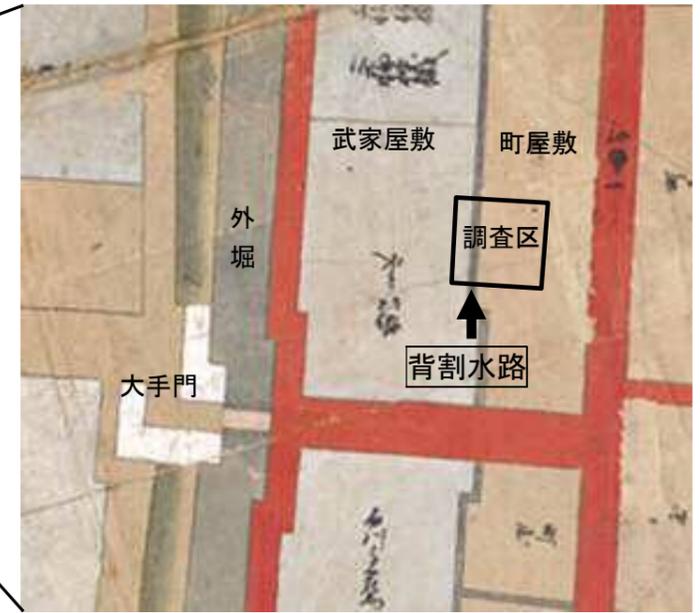
この水路は、江戸時代の複数の古絵図に描かれており、古いものでは万治年間（1658～1661年頃）の富山城を描いた『万治年間富山旧市街図』（右絵図）があります。少なくとも江戸時代前期には存在し、戦後まで280年以上の間使われ続けました。

今回の調査では、江戸時代後期から戦後まで3回の変遷を確認しました。

現在も背割水路があった付近を境に、北側が総曲輪三丁目、南側が一番町と町名が異なり、江戸時代の名残を留めています。



『万治年間富山旧市街図』（部分、富山県立図書館蔵）



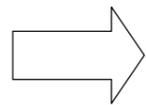
Ⅰ期

【時代】江戸時代後期（約200年前）

【規模】幅1.8m、深さ0.6～0.7m

【特徴】

- ・平らな川原石を水平に積む
- ・石列は一直線ではなく、やや蛇行する
- ・一部細かい補修を行う



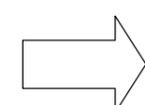
Ⅱ期

【時代】明治～大正頃か（約100年前？）

【規模】幅約1.3～1.4m、深さ？

【特徴】

- ・江戸時代の面が埋まり、上層に新しく造られた
- ・北側の石列の最下段のみ残る（他は壊されていた）
- ・Ⅰ期の水路より狭くなる



Ⅲ期

【時代】戦前～戦後（約70年前）

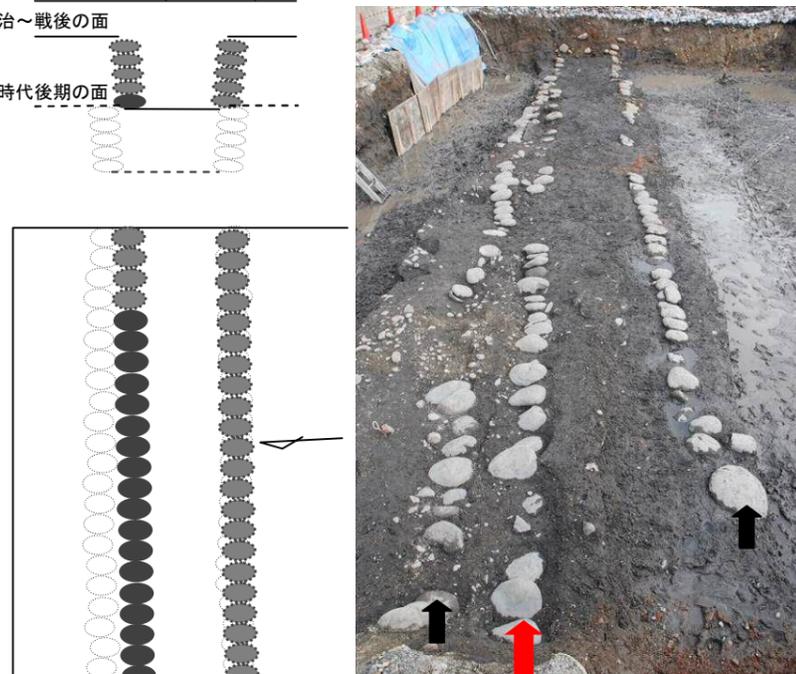
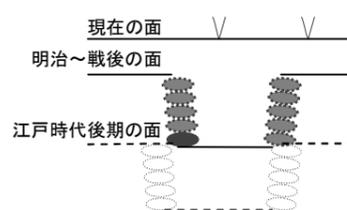
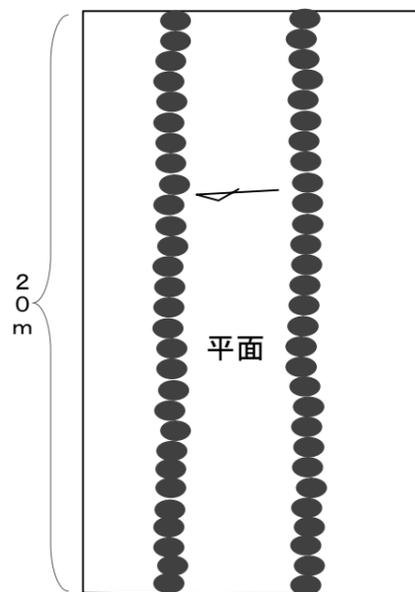
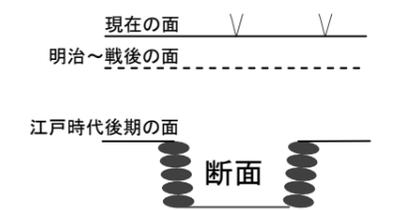
【規模】幅1.0m、深さ0.8m

【特徴】

- ・北側の石列がさらに狭まる
- ・川原石を斜めに積む
- ・水路の底面に石を敷く

凡例

- 各時代の見つかった石列
- 壊されて確認できなかった石列
- 前の時代の石列



Ⅱ期の水路の北石列  
（黒い矢印はⅠ期の石列）

